



青木 悠嘉 (あおき ゆか) 第七小 5年生

作品名:いのちのおはなしを読んで

図 書:いのちのおはなし

あらすじ

このお話は、笑顔がやさしい九十五歳現役の医師、日野原重明さんが四年二組の教室で命の大切さを知ってもらうための授業をするお話です。

命ってなんだろう…。私はこのお話を読むまで考えたこともありませんでした。日野原先生は、いのちは、きみたちのもっている時間だといえますよ、と言っていました。私はどうして日野原先生がいのちとは時間のことだと言ったのかわかりませんでした。でも最後まで読んでから自分なりに考えてみました。心臓が止まってしまうと、自分のために使う時間も人のために使う時間もなくなります。このことを命がなくなると言うのだと日野原先生は伝えたかったのだと思います。

今の私は、他の人のために何をしているんだろう。私のために動いてくれている人はたくさんいるのに…と、少しはずかしくなりました。それをお母さんに相談したら、今は、遊んだり勉強したりが一番のお仕事。もう少しお姉さんになったら、少しずつ人のためになることをがんばってみたら、と言ってくれました。でも、私は今からできることはやってみようと思いました。この本の中で日野原先生は人間が生み出したものの中であいさつの言葉ほどすばらしいものはありません、と言っています。今は人のために何かするのはむずかしいけれど、元気にあいさつをすると自分も他の人も気持ちよくすごせると思います。だから私は、ふだんからあいさつをすることを心がけようと思いました。

私がこの本を読んで、一番感動したのはあとがきです。九十五歳の日野原先生が自分の残りの時間をなるべく人のために使いたいと言っていたからです。私だって、人のために時間を使おうと思えば使えるはずです。家で家族の手伝いをしたり道をきれいにしたり、いろいろな事ができます。あいさつの他に、一番自分に身近な家族の手伝いから始めようと思います。そして大人になったら日野原先生のような立派な人になれるように努力したいと思います。